
「先輩、あのね。～tearlove～」

R i n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「先輩、あのね。」tearlove「

【NZコード】

N4291Z

【作者名】

Rin

【あらすじ】

「この恋は絶対に叶わない・・・」

彼女がいる先輩を好きになってしまった美香。

好きなのに近づけない。。。、

好きなのに、想いを伝えられない。。。

そんな切なく苦しい恋をする美香の想いに、

美香のクラスメイト・匠が気づき・・・。

彼女がいる先輩を想う美香。

美香に好きな相手がいても、守ろうとする匠・・・。

4人の複雑な恋が、時には離れ、時には絡み合つ・・・。

叶わない恋

（第1話）

先輩、あのね。

好きです、大好きです。

先輩は明るくて、氣もくで、こんな私にも優しくしてくれて。

先輩を見てるだけで、胸がきゅ～りとじめつけられて、ドキドキするんです。

…だけど、私がいくら先輩を想つても、この恋が叶うことはないんですね。

誰よりも、先輩のことが好きなのに…。

私の初恋は、絶対に叶うことのない、つらい恋なんだ…。

*

ピ―――！

「試合終了ー！」

試合終了の笛が鳴ったと同時に、同時に、体育館に歓声が響きわたった。

「やつたー！」

私も嬉しくて、思わず、立ち上がってしまった。

「ナイス、皇！」

「最高！」

「皆のおかげだつて！」

コートの中で、皆に囲まれてるのは、長谷川皇先輩。同じ高校の2年生。

バスケ部のエースで、明るくて、気さくで、皆に人気がある。

…そして、私の好きな人。

「皇つ、お疲れ様！」

走りながらコートの中に入つてくる、女人の人。

「夏希！」

先輩とその人が、ハイタッチしてゐる。私はそれを、悲しそうに笑いながら見つめていた。

私、桜木美香、高校1年生は、皇先輩に恋をしている。

先輩は、私の初恋なんだ。

…だけど、先輩には彼女がいる。

その彼女は、今、皇先輩と楽しそうに話してゐる、篠原夏希先輩。

夏希先輩は、皇先輩と同じ2年生で、生徒会の副会長さん。

美人で頭よくて、気取らなくて…、誰にでも優しい、皆の、憧れの先輩…。

「いいなあ…、夏希先輩は。」

私は、きゅうりゅうとしめつけられる胸をおさえながら、そう呟いた。

…私と先輩が、初めて会ったのは、雨の日だった。

その日私は、受験会場に行く途中で、でも口ケテ怪我して、傘も壊れちゃって…。

道端にうずくまついた。

「（えりうじゅうい、）のまおじゅうれあやう…」

その時、

「君、大丈夫？」

…困つてた私に、一番に声をかけてくれたのが、先輩だった。

「あ…、ちよひと「けちゃって」、「やつなの?あつ、もしかして君、受験生?」

「あ、はい。」

「そこ」の東高校?」

「そうです。」

先輩は時計を見ると、私の顔をジッと見つめた。

「…少しだけ、我慢してて。」

小さな声で、そう呟いた先輩は、私を抱きかかえた。

「え…。」

「すぐ着くからー。」

そう言って先輩は、私を東高校まで送つてくれた。

…ねえ、知ってる？先輩。

私にはその時、先輩がすっごく、キラキラして見えたの。

皆通りすぎてくれで、先輩だけが声をかけてくれた。

後から知つたけど、その日先輩には大事な試合があつて、先輩も遅刻しそうだったのに、私だけがの消毒までしてくれた。

優しくて、キラキラしてて…。

そんな先輩に恋をした。

なのに、彼女がいるなんて、知らなかつたよ。

あんなにキレイな彼女さんに、私勝てないよ。

…もう、好きになつちゃつたのに…。

だけどやつぱり、先輩のこと諦められなくて、先輩が入ってるバス
ケ部のマネージャーになった。

先輩は私のことを、ただのマネージャーとしか、見てない。

そんなことわかつてゐる。

…だけど、そばにいたい。

先輩に、見てもらえなくとも、好きになつてもらえなくともいい。

ただ、そばにいたいだけなんだよ…。

大粒の涙

（第2話）

キーンゴーンカーンゴーン…。

「美香、次、教室移動だよ！」

「あ、うん！」

3時限目の終わり。

私は教科書をそろえ、友達と一緒に教室を出た。

廊下を歩いていると、

「あつ、ねえ美香！」

「なに？」

「ほら、そこ！」

友達が、窓の外を指さしている。そこには…、

「ほら、匠くん（　〃　〃　）」

木にもたれかかって読書をしている、伊藤匠くんがいた。

匠くんは、私のクラスメイト。だけど、しゃべったことないや。クールで、授業出ないのに頭よくて、先生たちもなにも言えない感じの人。

けつこう、女子からは人気らしいんだけど…。

「匠くんさー、かつこいよねー（　〃　〃　）」

「そうかなー？」

「えー。美香、匠くんのこと、かつこいいと思わないの？」

「んー。別に……。」

確かに匠くんは、人を寄せつけない独特の雰囲気を持つてる。
女子からクッキーとか、絶対にもらわないんだろうな(○_○)

気づかれた恋心

（第3話）

ダン、ダン、ダン！

「皇、バス！」

「入れる皇！」

「おっしゃーーー！」

次の瞬間、先輩がふわりと宙に飛び上がり、ダンクショートを決めた。

「わあ……！先輩すごい！」

私はバスケットボールを磨いていた手を止め、つい先輩に見つてしまつた。

「（本当に）、キラキラしててかっこいいなあ……。）

私がバスケ部のマネージャーになつて、3ヶ月。

先輩がバスケ部に入つてゐるつてわかつて、どうしてもマネージャーになりたくて、友達と一緒に頼みにいつてもらつたんだつけ。

入つたばかりの時はちょっと不安だつたけど、やっぱり入つてよかつたな……。

部活は、私が先輩を見つめてられる唯一の時間。

他は、ずっと夏希先輩と一緒にいるから……。

その時、

「おーい、桜木！」

「（えつー？）」

私がバツと顔を上げると、そこには皇先輩と夏希先輩が……。

「ど、どうしたんですか？」

「なんかね、皇がさつきショートした時、ひざがぶつけられたみたいで……。」

夏希先輩が、少し呆れぎみに言った。

「桜木さん、手当をしてあげてくれる？ 私、ちょっと今、手が離せなくて。」

「あ、はい！」

鼓動がはやくなりだした。

私にとつては、願つたり叶つたりだし！

「い、今手当でしますねー！」

私は、消毒液を握る手が、震えてることに気づいた。でも怖い震えじゃなくて、緊張の震え……。

私は、深呼吸をし、落ち着かせてから、消毒液をふくんだティッシュを、先輩のひざに当てた。

「うわ、しひれるー。」

「い、痛くないですか？」

「平気だよ！」

「あ、はい！」

ひざに当てていたティッシュを、もう一度ひざにギュウッと押しつけ、

離した。

「今ばんそうこう貼ります！」

と、勢いよく立ち上がった瞬間、床のティッシュに足をすべらせ、私は後ろ向きに倒れた。

「つわつ！」

「！！桜木、危ない！」

どっしーん！という派手な音に、体育館にいる全員が振り向いた。私は、転んだのに痛くないことに、頭に？マークを浮かべていた。が、後ろを見ると、そこには痛そうに顔をしかめている先輩が…。
「せ、先輩！すみません！」
ようによつて先輩にけがさせちゃうなんて…！
私の顔が真つ青になつた。

「大丈夫ですか？」

私が先輩の腕を掴もうとすると、先輩がいきなり立ち上がった。そして、私にニカツとした笑顔を見せた。

「オレは大丈夫！頑丈なんだよ！てかそれより、桜木大丈夫か？どこか痛いとこない？」

ドキン…。

先輩、自分もけがしてるのに、真つ先に私の心配してくれるなんて…。

「…先輩は、優しすぎます。」

「…え？」

言い終わつてから私は、ハツとした。

「せ、先輩のこと、嫌いじゃないです……。ただ、うまく話しかけられなくて……。」

私はバツと頭を下げた。

私は必死に先輩に伝えた。

「いやオレも、ずっと桜木に、なんか……、恐がられてる? つーか嫌われてんのかなって……。」

「え!? 何ですか! ?」

「だつて桜木、いつもオレと田があつと、顔そりすだり? 」

「そ、それは……。」

「だからさ、嫌われてるのかなって。」

「私、そんな風に思われてたんだ……。」

「どうしよう……、

誤解ときたいよ……!」

「……さ、嫌いじゃないです。」

「え……?」

「あ、あの……。」

「……すげー、びっくりした。」

「え……?」

「え……?」

私が顔を上げると、先輩が、照れたような、嬉しそうな顔をしていた。

「いやオレも、ずっと桜木に、なんか……、恐がられてる? つーか嫌われてんのかなって……。」

「え!? 何ですか! ?」

「そ、それは……。」

恥ずかしかったからなんですが……。

「誤解させてしまったなら、『じめんなさい…』

しばらくの沈黙が続いた。

先輩、引いちゃつたのかな…。

でも、誤解されるよりはいい…。

とその時、私の頭に、温もりがある先輩の手がおかれた。優しくてあたたかい手…。

「ありがと、桜木。」

「先輩…？」

「桜木の気持ち、ちゃんと伝わった。ありがとな…！」

「っはい…！」

先輩、大好きです。

あなたのその、優しくて、輝いた笑顔は、皆を幸せにする。

：私、先輩を好きになつて
本当によかつた…。

「ヤバい！遅くなっちゃつた！」私は部活の成績表を持ち、教室へ戻ってきた。

窓の外はもう真っ暗で、風がヒューヒューと音を立てていた。

「早く帰んなわやー。」

カバンを取り、帰る支度をしていたその時、

「ちよっと待てよ。」

え…？

私がゆうべつと教室のドアを開けると…、

「た、匠くん…。」

「ちよっと話があるんだけど。」

「私に話…？」

「私、何かしたっけ…。」

「あの、なんの用で…。」

「あんた、2年の長谷川皇のこと好きだろ？」

いきなり匠くんの口から飛び出した衝撃的な言葉。

私はその場から動けなかった。

窓の外では、一段と風が「ウウウウ」とうなりをあげていた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4291z/>

「先輩、あのね。～tearlove～」

2011年12月20日18時45分発行